

下稲葉康之先生の新著の出版をお祝いして

この度は、「ホスピス わが人生道場」（いのちの言葉社刊 2017）の出版、誠におめでとう
ございます。

本書は、がんで死なれた方を長年見守ってきた下稲葉先生の珠玉の言葉と先生が寄り添わ
れた感動的な人生談で満ちています。本書を読まれる患者さんやご家族は慰められ、
そして医療関係者は、大きく励まされるに違いありません。

先生が栄光病院の前進の亀山病院に勤務されホスピス活動を始めた 1980 年、ぼくは医学部
を卒業しました。当時の医学教育ではホスピスのことも緩和医療のことも全く教えていま
せんでした。ですから、先生は先駆的で挑戦的なお仕事をされたのだなと思います。その
後ぼくは 1982 年から 87 年まで、米国のメイヨークリニックで精神科のトレーニングを受け
たのですが、特に驚いたことが二つあります。一つは、病院にチャペルがあり、廊下をチ
ャプランや司祭が、当たり前のように医療関係者とともに行き交っていました。また、患
者さんたちは、いつでもチャペルに入り祈りを捧げることができるのです。もう一つ一
つは、がんのサポートチームがすでにあつたことです。主治医とナースに加えて、精神科医、
ソーシャルワーカーがチームを組んで、入院中のがんの患者さん達の治療にあたっていま
した。相続などの法相談にのってもらえる窓口すらある、と聞きました。

帰国後も、がんの患者さんのケアに関心があつたので、国立がんセンター（国がん）に出
入りしていました。当時は、国がんですら、非常勤の精神科医が一名ただけで、こころ
のケアの体制は不十分でした。ある麻酔科の先生がモルヒネを用いたペインコントロール
の重要なことを熱く語っていたことが印象的でした。すでに WHO による疼痛緩和のプ
ログラムが発表されており、普通の鎮痛剤で取れない痛みには積極的にモルヒネを使うこ
とが推奨されていたのです。しかし、日本の医療現場では、がんの末期では痛いのは当然で
あるとか、モルヒネを使うと依存になるからという理由で、十分な使用を控える医師が多
かつたのです。国がんでは、総長以下、日本に緩和医療を浸透させようと一生懸命でした。

もう一つ国がんが取り組んでいたのが、サイコオンコロジー（精神腫瘍学）活動でした。
センターに精神腫瘍研究部を作るといふので、部長として来ないかと誘われたことがあり
ます。行かなかつた訳ではなく、応募したのですが、見事に落選してしまつたのです（笑
い）。

話は変わりますが、あるときの授業で、学生から「良い医師になるためにはどうしたらよ
いか」と聞かれたのです。本に書かれていることを繰り返すのも芸が無いと考えていると

きに、下稲葉先生のことが浮かびました。「良い医者になろうと努力していると、やがてとても良い顔になっていきます」と答えたことがあります。ぼくはそのとき、下稲葉先生のお姿を思い浮かべていました。ハンサムや美女かどうかは別にして（笑い）、長年、微笑みを浮かべ、時に悩み、涙を流して患者さんに寄り添っているうちに、自然と素敵な表情になっていくのだろうと思ったのです。

下稲葉先生は、37年もの間、がんの患者さんに尽くしてこられました。神様の僕として、主に仕えるように、患者さん家族に仕えてこられました。最も小さな者たちのひとりにしたのは、わたし（キリスト）したのです（マタイ 25 章 40 節）という言葉とその精神として栄光病院は今日まで至っています。先ほど先生は講義の中で、スーザン・ソンドーグの言葉「私がホスピスを作ったのではない、ホスピスが私を見いだしてくれたのだ」を引用され、「それは私にも言えることです」、とおっしゃった。その言葉を聞きながら、ぼくは、「先生は、神様に用いられた方なのだ」と思ったのです。

下稲葉先生と栄光病院の皆様方の貴いお仕事が、これからもさらに発展することをお祈りいたします。

2017年2月22日、栄光病院礼拝堂にて、